『國民新報』1940年3月31日

[主張]　汪政權の成立[[1]](#footnote-1)

　のなんて いふことばは、である。のとつてても らない。の とでもふべきか。は、この三つをはせてへるのが、もつともで あるかもれぬ。いづれにしても、にばしいことで おいことである。にのために ぶのでもなく、はたまた三くのととを、にして つたのために ぶだけではない、にアジアのために、いては のためにぶべきことである。

　し汪にして たなかつたならば、のは にきかつたことであらう。のにびかけた、をじ に應へて、汪のきなるが ちがつたればこそ、こゝに ののをぐはたのだ。この汪をとした、ののに のをげるとに、だに、につて 弓を射るからめずに、をにれつゝあるところの、蔣一のを さざるをない。

　の、のの にてめらるゝの のするまで、のいたはして決してには らぬである。このは、がするき、をとするのではないことは、、のと、つて それがたる汪のによつて らかである。このは、のだ。ののたる八紘一といふ のためのだ。かるがに にはと いふものもなければ、といふものもないのだ。が になつてても、一もへ くことはないのだ。だとして、すべてのてするを することあるのみである。

　の のをふにあたり、は一、の のをめなければならぬ。かしき ののにしつゝ をそれにし、して、このののため、して のをめ、あらゆると にんでへるをえねばならない。

　にわがは々の がにはつてるのだ。にに、にさうであるばかりでなく、くくはにもながはされることを されてゐる。たるもの、このの、にして、しく、のをせねばならない。にこれは千一のであつて、のために、もつともあるであることをせねばならぬ。

　の來をすると に、々のをばう。

1. この文章は単行本『同胞に寄す』に収録されていない。この文章は一部「わかちがき」 [↑](#footnote-ref-1)